＃３「オレンジカフェ よりみち」（埼玉県さいたま市）

１．概要

運営主体	埼玉福祉保育医療専門学校/大宮区東部圏域地域包括支援センター白菊苑		
所在地 （基礎自治体）	埼玉県さいたま市	人口規模* （基礎自治体）	1,331,961 人(R4.3 現在)
（活動範囲）	さいたま市大宮区	（活動範囲）	121,299 人（R4.3 現在）
活動拠点の種類	学校（埼玉福祉保育医療専門学校）		
活動開始年	2019（H31）年		
活動概要	・専門学校の介護福祉士科の授業の一環で、地域包括支援センターと専門学生の１年生、２年生によるオレンジカフェの企画・運営が行われている。 ・地域の高齢者が参加し、学生と高齢者によるカフェを通じた交流が行われている。		
対応する地域課題	地域におけるつながりの希薄化/就労や社会参加の機会がない（乏しい）/世帯が抱える課題の複雑化・複合化/生活支援ニーズの増加		

*人口出典：さいたま市 WEB サイト「さいたま市の人口・世帯＜分析ツール＞」https://www.city.saitama.jp/006/013/005/001/p073465.html

２．活動の展開プロセス

■地域の状況

・さいたま市では地域活動の拠点づくりに力を入れており、大宮でも急速に拠点が増えていったが、活動したいという人が増えれば増えるほど活動する拠点が足りない状況になった。

・さいたま市の大宮という地域は人口も多く、公民館や自治会館はあるにはあるが、それ以外に活動する場所が少ない。貸会議室を借りるにしても大宮は土地代・賃料も高く、難しい。有料老人ホーム等の一角を借りてオレンジカフェを運営していたが拠点が少なく、場所探しに苦労していた。

■場所探し・場所確保－学校と包括の連携－

・活動する場所を探す中で学校の場所等を有効活用できないかということで包括が学校に挨拶に出向いた。

・学校側としても企業連携や産官学連携を積極的に考えていたタイミングであった。

・挨拶の時点ではオレンジカフェを最初から始めようというわけではなく、学校と一緒に何かできないか、というところで、認知症サポーター養成講座の開催や、学生にオレンジカフェや運動教室等に来てもらえないか、など包括が提案する中で、学校の場所を使ってもらい授業の一環でそのような取組が出来たら、という話が学校側からなされた。

・その中でオレンジカフェの運営が良いのではないか、ということで 2019（H31）年から取組がスタートした。

活動場所の確保について POINT

場所探しの段階で、学校以外に一般企業にも協力をお願いしている。
しかし「地域包括支援センター」を知らない企業も多く、新たな繋がりを作る
難しさを痛感し、地域の拠点づくりにおいて検討事項も多いと感じた。

その中で、福祉の専門学校であれば、高齢者や福祉の分野に理解もあり、
かつ生徒は将来支え手を担う存在であることに着目した。
生徒が取組に参加してもらうことで、継続的に支援者として参加してもらえること、
また将来の人材育成にもつながると考えた。

■知識・技術習得－企画作成と準備－

・2019（H31）年度の前期から取組に関する日程等の具体的な話合いがなされ、学内にて企画書を作成。企画・実施について許可が出たことで取組が開始。
・2019（H31）年度の後期から、包括によるオレンジカフェや包括とはどのようなものなのか、また認知症の方への接し方など、実際の包括の業務のなかで学生に伝えられることを授業内で 3 回に分けてレクチャー。
・地域でオレンジカフェが必要とされていることを学生に認識してもらった上で取組を実施する形となった。
・本番に向けてシミュレーションも行い、実際に高齢者役と運営スタッフ役に学生を分けてどのような流れでどこでつまづいたか、どうやったらいいかということを包括も見ながら固めていった。

学生にもっと主体的に取組んでもらうために POINT

学生に対して授業の形で事前説明をするにあたって、
包括職員も初めてのことであったため手探り状態であった。
また学生が積極的に取組めるよう、試行錯誤を繰り返している。
例えば当初は常時包括の職員が 3 人体制でサポートしていたのを
2 人に減らしたり、包括職員は運営を見守り、必要な時には助言をしたり
出来る限り“学生が主体となって”運営できるよう、工夫を行っている。

■取組の様子と効果

・実際にオレンジカフェを運営したところ、学生も初めてのことで緊張があった。話に詰まってしまう学生もいたり、逆に留学生は母国の話で盛り上げる、といった様子であった。
・オレンジカフェを運営した後は必ず包括による振り返りが行われ、その際に「話すことが全てではなく、傾聴、聞くこともとても重要である」というフィードバックをしたところ、学生はその言葉に安心していた。
・参加者の方もたくさん集まり、学生もとても楽しそうに取り組んでいた。
・高齢者の参加者も趣味を披露する場所にもなり、また学生に話を聞いてもらえる場がうれしい、楽しいという反応をしており、学生も自分でお話したことで誰かを笑顔にできるということを目の前で実感できたということで自信にもつながり、前向きな気持ちになっている。
・高齢者の参加者はリピーターも増えており、オレンジカフェよりみちの開催を楽しみにしている様子である。

3. 今後に向けて

（１）今後の展望

■運営方法

・お話をすることがメインではあるが、体操など学生が高齢者の前に立ち、何か企画もできないかと考えている。

・学校としても学生の運営の仕方について、今は臨機応変に対応ができていないところがあるので、自分で考えて自分で行動するということができるようにしていきたいと考えている。

・最終的には 10 名ほどで運営できるようになればいいと考えている。

■ケアマネジャーの参加

・現在参加者の声掛けは包括がほとんど行っている。

・今後ケアマネにもオレンジカフェの取組の紹介をしつつ、実際にケアマネ等に専門学校で行っているオレンジカフェの見学や参加者の声掛けもしてもらいたい。

（２）自治体・社協・包括等に期待すること

■拠点探し・地域の理解促進の取組

・包括によって、活動できる拠点を探しているが、そもそも地域包括支援センターの存在を知らない一般企業が多いため、企業からの協力を得ることが難しい。

・包括単独で連携を図るだけではなく、包括単独で連携を図ることが難しい場合等には、市や社協と共に進めていきたい。

・包括の認知度を少しでも上げるために市としてもバックアップをしていることを示すさまざまなツールがあるとよい。

・自治体等から住民向けに担い手の研修をするように、企業向けにも生活支援に関する研修や講座を開いてほしい。

活動団体の情報	埼玉福祉保育医療専門学校 TEL　048-649-2331 WEB サイト　https://www.scw.ac.jp/ 視察の受け入れ：可（時期や申込のタイミングによっては難しいことも可能性あり） 大宮区東部圏域地域包括支援センター白菊苑 TEL　048-658-5588 視察の受け入れ：基本的に可（状況の変化もあるため、要連絡）